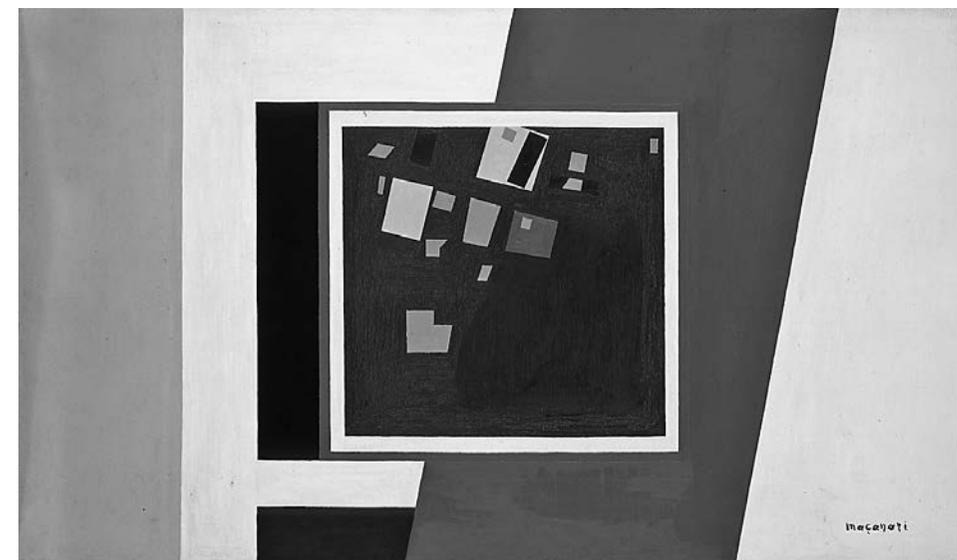


時代で見る美術 1940年代

Art by Period: The 1940s

会期 2023年6月22日 | 木 | -9月10日 | 日 |

会場 近現代美術室 B



村井 正誠《Cité 2》1940年

1940年代はアジア・太平洋戦争のただ中、そして戦後にあたり、国民の生活はさまざまなかたちで社会の変化に翻弄されました。

美術の分野も例外ではありません。多くの美術家たちは、従軍画家として戦地を描き、または戦中の市井の暮らしを描き国策の一環を担うことを余儀なくされました。戦時中のキャンバスや絵具が配給制となって制作を中断した者、徴兵されて画家となる道をはじめから断たれた者もいました。一転し、終戦を迎えると、戦地に赴いていた者は復員し、占領下において、美術展の開催や美術団体の活動も再び盛んになりました。新たな時代の空気を感じ、美術家たちは新たなテーマやモチーフを模索し始めます。

本展では、当館のコレクションから、1940年代に発表された作品の一部をご紹介します。多彩な作品には、大きな変化に直面した表現者たちの心の持ちようが刻まれています。変化への戸惑い、生々しい傷あと、復興に向かう開放的な気分など、作品は時代の証言となり、一方で、時代に抗って表現へと向かう美術家の姿も見えてくるでしょう。

[学芸員 忠 あゆみ]



福岡市美術館
FUKUOKA
ART
MUSEUM

〒810-0051
福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051 (代表)
FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

衛美術家として活動。写真の分野でも活躍し、写真雑誌の特派員として東アジア各地を撮影。1941年に陸軍に写真家として徴用され、フィリピンに従軍。1943年には現地の女性と結婚し、子をもうけたが、形勢が悪化すると収容所に抑留され、家族は離散した。1946年に帰国すると画壇に復帰。生命を植物や虫のような形でシュルレアリスティックに表現した。

松本 竣介 1912-1948

東京都出身。1929年、太平洋画研究所に学び、麻生三郎や寺田政明らと親交を深める。1930年、前衛美術グループ「NOVA美術協会」に加わる。1932年、少年期の病気が元で兵役を免除される。1935年、二科展初入選。以後は二科展・九室会展で作品を発表する。1936年に雑誌『雑記帳』を創刊。1941年、美術雑誌『みつゑ』4月号に軍部による美術統制に反論した文章「生きてゐる画家」を掲載。1943年戦意高揚のための戦争画展へ出品するも作品に納得がいかず、以後戦争画を描くことはなかった。1947年、自由美術家協会に参加。病没するまで精力的に制作した。

棟方 志功 1903-1975

青森県出身。ゴッホの《向日葵》に感銘を受け、油彩画家を志して1924年上京。国画創作協会第5回展に出品された川上澄生の《初夏の風》に感銘を受け、1928年に日本版画協会展に初入選。1936年《大和しうるわし》で黒と白を基調とした表現を確立、1938年に文展特選。同作が濱田庄司の目に留まったことを契機に民藝運動の作家たちと交流し、仏教や古典文学の知識を深める。1945年の春に富山県へ疎開し、同地で終戦を迎える。戦後はサンパウロ・ビエンナーレやヴェネツィア・ビエンナーレなど国際展で高い評価を受け、また本人の個性的なキャラクターが大衆的な人気を博した。

関野 準一郎 1914-1990

青森県出身。旧制中学時代に同人誌「緑樹夢」の同人となり、以後版画誌に投稿する。卒業後、今純三のアトリエで木版、銅版、石版画技術の習得に励み、1925年に上京。恩地孝四郎を師と仰ぎ、弟子を中心とする研究会「一木会」を結成。戦時中は日本版画奉公会の理事となり、機関誌『エッチング』には戦争と版画に関する言葉を寄せている。終戦後の1950年代には高円寺の自宅を「火葬町銅版画研究所」と名づけ、そこで開催した銅版画の勉強会には多くの美術科・文化人が集った。恩地の影響のもと幾何学的な構成やデフォルメを試みた一方で、人間像を追求した具象作品も多数残した。

など幅広い領域で活動。1926年に朝鮮総督府壁画を制作。1932年、東京美術学校図案科主任になる。戦時中には戦争記録画を制作。戦後は京都に拠点を移し、日本画制作を中心に精力的に活動。戦後の主な仕事に映画『地獄門』の衣装・色彩考証、《博多繁昌の図》、《西都政庁の図》(1958年)がある。

吉田 博 1876-1950

福岡県久留米市出身。中学修猷館在学中に教師吉田嘉三郎に画才を認められ養子になる。画塾・不同舎で小山正太郎の指導のもと水彩や鉛筆写生を学び、徹底した修業ぶりから「絵の鬼」と呼ばれた。1899年に渡米した際に作品が高く評価され、数度に渡り欧米で展示を行った。帰国後は「太平洋画会」を先導し、重厚な油彩画を発表した。1920年代以降は木版画制作にも打ち込み、山岳風景を中心に生涯で250点ほどの作品を残した。1938年から3年連続で従軍画家として中国に滞在した。戦後は進駐軍とも親しみ、自邸で版画の実演をするなど文化交流を行った。

寺田 竹雄 1908-1993

福岡県糸島郡(現・福岡市)出身。修猷館在学中に渡米し、カリフォルニア美術専門学校で学ぶ。卒業後に画家として活動し、アメリカ政府公共事業促進局の依頼でコイトタワーに壁画を制作。1935年10月に帰国すると、1936年二科展に《アメリカ風景》を初出品し、以後二科展を中心に活躍。1941年から44年まで従軍。1945年には戦時中に一時解散していた二科会の再建に参加。力強い筆致による裸婦像や風景画を得意とし、西武デパート池袋本店、国立競技場、松竹本社会館など多数の壁画を手掛けた。日本美術家連盟理事、国際美術連盟国内委員長をつとめ、美術家の国際交流にも尽力した。

中村 研一 1895-1967

福岡県宗像市出身。福岡県立中学修猷館在学中に児島善三郎、実弟の中村琢二らと「パレット会」を創設し、絵画制作に勤しむ。1920年、東京美術学校西洋画科を卒業。同年、帝展に初入選。1921年、帝展で特選受賞。1923~28年、渡仏。1927年、サロン・ドートンヌ会員。戦時中は多数の戦争画を描き、中でもマレーシアのコタ・バルに取材した《コタ・バル》は1942年度朝日文化賞を受賞した。戦後は明るい色調の人物画を得意とし、帝展、光風会を舞台に活躍。日展の審査員、参事、理事などを歴任。1950年、日本芸術院会員。

阿部 展也 1913-1971

新潟県出身。1932年独立美術展に入選。翌年「1940年協会」を結成。福沢一郎を中心にしたグループ「美術文化協会」に参加、瀧口修造と詩画集を共作するなど、前

